現役職員寄稿

西暦２０００年、入職当時のこと

地域生活支援部長　大門　一司

大学の人事により２０００年４月１日、この病院に入職した。その日は土曜日だったので、実質の初出勤は４月３日であった。最初の１週間の勤務が終わる４月７日金曜の夜のことは今でも鮮明に覚えている。「なんて長い１週間だ！」と、その当時乗っていたホンダ CR—V の車内で叫んだことを。それまで大学や前の職場で診療していた患者はうつ病や統合失調症であった。当時の精神科診療のメインストリームであった。ところがこの病院の外来で出会った患者はこれまでほとんどみたことがなかったエネルギーに満ちたあふれた若者（診断はいろいろ）や痩せほそった摂食障害であった。彼ら彼女らに対してどのように接したらいいのか、治療したらいいのかよくわからず途方にくれていた。またいきなり担当した入院患者がスタッフに対してかなり激しい暴力行為をしたため、どうしたらいいのか悩んでしまった。そんなこんなで精神的にかなり疲弊した１週間であった。

その当時の私はまだ３０代であり、身体的にも精神的にも今よりははるかに健康であった。メタボではなく、髪の毛は黒々としており、血圧も甲状腺機能も正常であった。だから未知との遭遇のような１週間を何とか乗り越えられたのであろう。体重が５キロ増え、白髪となり、高血圧、甲状腺機能低下症の今の私なら間違いなく出勤拒否になっていた。

仕事はハードであったが、職場の雰囲気はすごく良かった。これが救いであった。入職当時の病院はまだ築６年目できれいで、斬新なデザインの単科精神科病院であった。当時の医局は京都府立医科大学、京都大学、滋賀医科大学の医師の混合部隊で構成されていたが、みんな仲は良かった。看護師、作業療法士、臨床心理士、ケースワーカー（その当時は精神保健福祉士という職種はなかった）など多職種と協働することを初めて経験し、すごくやりがいを感じていた。当院で統合失調症（当時は精神分裂病と言っていた）の家族教室の立ち上げ準備に協力し、５回シリーズで教室を開催した。患者のご家族に「勉強になりました。」と言ってもらえたことがすごく嬉しかったことを思い出す。そのあとのスタッフでの打ち上げ会も非常に楽しかった。

この原稿を依頼され入職当時を思い返してみた。古き良き時代であった。

温かく寄り添う看護を大切に

看護部長　大塚　喜久江

看護師の免許を取得してからずっと一般科で働き、患者さんの病状でつらい思いをしたり悩むことも多々ありましたが、充実した毎日でした。患者さんとの関わりはやりがいがあるのですが、患者さんの中には、精神疾患を持っておられる方があり、その方との接し方では戸惑いを感じることがあり、精神疾患の方への寄り添い方を学びたいと思い、当センターに異動しました。

そこで一番印象に残っているのは、平成の時代にもかかわらず、病院で長期に療養（生活）されている方が多くおられることでした。職員たちは、日々の患者さんの身の回りのお世話や診療介助はもちろんのこと、患者さんの思いを聞き、その思いに寄り添う看護を実践していました。その中には入院環境を整え、居心地の良い入院生活を送れるようにしてきたこともありました。

私が精神科で働く少し前ごろから、精神科においても地域生活を基盤とするように求められていました。当センターにおいても数年間（長い方は１０年を超す）と長期で入院されている方が複数名おられ、その方たちも病院ではなく地域社会で生活していただけるよう、いろんな職種のスタッフが意見を出し合いながら、病院以外の地域支援者とも連携を取り、患者さんらしく生活できるよう支援していきました。もちろん、話し合いの場には患者さんがおられ、患者さんの思いを大切にしながら話し合いました。患者さんとスタッフが一丸となって取り組むことで、生き生きと地域で生活される方が増えてきています。

かかわりが必ずしも上手くいくとは限りませんが、あきらめずに取り組むことで、前進すると信じています。精神科の患者さんは思いやりのある方が多く、私自身の心が洗われることもあります。これからも精神医療センターは、県民に信頼される質の高い医療の提供、「人権を尊重し、利用者本位の看護をめざします」の看護部理念のもと、精神疾患を持った方たちに寄り添った看護を提供し続けるため職員一同、切磋琢磨し頑張ってまいります。

センターとともに

地域生活支援部　社会復帰支援係長（作業療法士）加藤　郁子

私は、平成４年４月、作業療法士として滋賀県に入職し、精神保健総合センター社会復帰部（当時）の配属となりました。開設までの約半年間は、マニュアルの作成、患者さんが使用する机や椅子、作業や検査道具の購入などの事務作業をひたすら行っていました。そして新人研修。そこから早いもので３０年、長かったような、あっという間だったような不思議な感覚です。新しい病院だったからこそ様々なことを試すチャンスに恵まれ、精神科デイケアや作業療法を開設する機会を頂きました。一方で、作業療法士に何ができるのか、実践で認めてもらうことに日々悩むこともありました。

しかしながら、これだけ長くこの病院で勤務し続けることができたのは、たくさんの人との素晴らしい出会いです。初代所長、次長、部長も新人の私に気さくに声をかけてくださり、身近な先輩からは、学ぶ機会を与えてもらえ、そしてたくさんほめてもらいました。職種を越えた仲間からは、たくさんの刺激をもらい、時の経つのも忘れて臨床の話をしていた時間が今も私の原動力となっています。

患者さんとの活動の日々も私にとって忘れられない出来事ばかりです。時折デイケアを卒業したメンバーが、フラッと「元気にしていることを伝えたくて」と会いに来てくれることがあります。利用したメンバーの人生のほんのひと時、ともに過ごす中で皆さんの心に少しでも何かを残していればそんなうれしいことはありません。リハビリテーションは、医療として様々な手法や専門的なプログラムがありますが、私は活動をともに行う「今ここで」という考え方がとても好きです。共に過ごす中で、患者さん自身が気づくこと、私も伝えたいこと、これらがあわさって、温かい時間が流れます。出会った場所がセンターであっても、この出会いを大切に、安心できること、自分の感情を出していいこと、自然に笑顔になる喜び、自分がどうしたいか決められること、それらを応援しながら過ごす毎日は、私にとっても成長させてもらえたなと感じています。

設立３０年は私の勤続３０年にあたります。この間作業療法士はじめ、心理士、精神保健福祉士の人数も増え、たくさんの後輩ができました。後輩の悩みや努力する姿に私自身も心新たな気持ちになります。３１年目からは、またフレッシュな気持ちで頑張りたいです。

設立３０周年記念誌発刊にあたり

放射線科主任主査　橋本　弘

元放射線技師の橋本です。

設立３０周年おめでとう御座います。

私は設立準備から携わって通算１１年間お世話になった者です。

思い起こせば放射線科にはMR装置、CT装置、一般撮影装置と最新鋭の機器を導入し準備万端の状態で開業を迎えましたが開設当初は幾日も検査ゼロがつづきました。

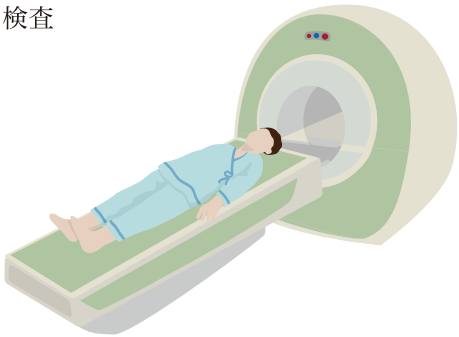
このままではダメダと思い、設立目的でもあった地域の医療貢献を推し進め、診療部長を伴い滋賀医大の教授（脳神経、婦人科等）、医師会の担当理事に対し検査の依頼営業に奮起したものです。

その甲斐あって日にMR検査１０件以上CT検査３件以上の検査依頼を頂き病院の収益、地域の医療に貢献でき最初の担当技師としての役割が果たせたと自負しています。（やり切った感があります）

また、当時の病院長、看護部長、事務次長さんを含め全職員でのリクレイションを楽しく行ったことに当時を懐かしく思いだされます。

大変な事もありましたが楽しかった事が多かった職場でありました。

これからも皆さんは複雑多様化する社会での精神医療は増え、今以上に複雑化する事でしょうが日々研鑽して頂き未来永劫頼られる病院運営に期待し挨拶とさせて頂きます。



滋賀県立精神医療センター 大井 健 院長 インタビュー

－休日はどのように過ごされていますか。

休日はパソコンで囲碁のゲームをしています。また、最近は2歳になった孫と遊んでいます。３人の子どもと孫２人がおり、それぞれ近くに住んでいます。

－ご出身はどちらでしょうか。

出身は石川県金沢市です。金沢の街中に住んでおり、中学校の近くに兼六園がありました。昭和３３年生まれです。金沢の冬は長靴と傘が必需品でした。

滋賀医大を受験した日、敦賀トンネルを抜けるとそこは晴天でした。小学校3年生の時、ちょうど昭和３９年に名神高速道路が開通した頃、父の車で高速道路に乗って滋賀県まで遊びに行きました。琵琶湖を見に行きましたが、その時も晴天で、自分の中では滋賀県は土地も人も明るく暖かいイメージがあります。

－子ども時代の思い出は？

子ども時代はプラモデルを作って遊んでいました。タミヤやバンダイの３５分の１や４８分の１の戦車や船を作っていました。上に4つ違いと5つ違いの兄がいますが、兄は優しくて、プラモデルを作るのもよく手伝ってもらいました。４つ上の兄は医者になり、５つ上の兄は芸術の方向に進んでいます。

－学生の時代の思い出はありますか。

高校2年生の時に医学部への進学を希望するようになりました。滋賀医大入学時、私は2期生で、2年生まで守山のキャンパスに通っていました。学生時代はヨット部に所属していましたが、１年生の時にヨットが沈む体験をしたこともあって、２年生でやめました。あとは友達と麻雀もしていました。

－どうして精神科に進まれたのでしょうか。

幼少期に身近に精神を患っていた方がいたことが心象的背景にあると思います。その後医学部に進んでから精神医学に関する論文を読み、精神科に対するイメージが具体的になったことと、滋賀医大の精神医学講座の初代教授の高橋三郎教授のお人柄が良かったこと、精神科の医局のスタッフに良くしてもらったことなどにより精神科に進もうとおもいました。

初めは精神科に対してその閉鎖的イメージから怖れを感じていましたが、意外に患者さんは医者に対して優しく、滋賀医大の精神科では暴力もありませんでした。

また、辻元宏元院長が医師になられた直後の１９７０年にジュリアス・アクセルロッドがカテコラミン系神経伝達物質の神経細胞からの放出と再取り込み研究でノーベル生理学医学賞を受賞していますが、前後して我が国でも脳内アミンの研究は活発でした。先生もその一人であって先生の指導の下、私も一時脳内微小アミン＝マイクロアミンの研究をしました。当時は精神疾患に対する学術的な着目度が高まっている時期でした。

－滋賀県職員としてご勤務される中で思い出に残ることはありますか。

医大卒業後は、滋賀医科大学医学部附属病院、富山医科薬科大学、国立精神神経センター神経研究所などへの勤務を経て、滋賀医大の医局に求人が来ていたことから平成７年度に当センターに着任しました。当時のセンターの医局には同級生の明神医師や、増井医師がいました。

センター開設当初はお祭りのような行事も多く、患者様と遊ぶことも多かったです。また、職員同士の交流もさかんであり、東矢倉の寮に医師や看護師が集まって話をすることもありました。

平成１０年、２１歳の患者様のご不幸から燃え尽きかけていた私に、田崎正善元院長からお声かけいただき、平成１２年度から保健所長として水口保健所に勤務をしました。その後水口保健所に6年、草津保健所に3年ほどおり、平成２０年度から辻元院長の要請を受けて当センターに復帰しました。

滋賀県職員として勤務する中で思い出に残っていることは、平成１４年度の水口保健所長時代に、大戸川のフェノール汚染の対応で2週間くらい保健所に缶詰めになったことです。逆に良い思い出は、平成２５年度に当センターで医療観察法病棟を立ち上げたことです。

－ご定年後はどのように過ごされるご予定ですか

現在６５歳になり、実体験として精神科医療の経験を積んできたことから、定年後も精神科医としての仕事を続けたいと思います。

－当センターの未来についてどのようにお考えですか

当センターに関わらず、精神科の未来として、子どもの精神治療に関心が向けられると思います。昔は精神科の治療といえば統合失調症が主流でしたが、現在の臨床では心的外傷による精神疾患が増えている実感があります。当センターにつきましても、今後は子どもの発達障害と依存症治療の専門医療を強みとしながら、治療対象をより低年齢化かつ広範囲化にシフトしていくことが求められるのではないかと思います。

－本日はお忙しい中インタビューをお引き受けいただきありがとうございました。

語り手：滋賀県立精神医療センター院長　大井　健
聞き手：　同　次長　柴宮　裕
　　同　主査　岡崎　郁子
令和4年11月28日　院長室にて